



## 福音と文化

山内 清海

長崎教区司祭

すべての国の人々にキリストの福音を宣教するという教会の使命は、現代にこそ強調されるべきです。教会は、ゆだねられた信仰の遺産を完全かつ純粹に保つだけではなく、それをできるだけ現代人が納得できる方法で宣べ伝えるべきだからです。ここに、「福音宣教の概念が変わった」としばしば言われる理由があります。キリストを全く知らない人々に福音を伝え、彼らに洗礼を授けることを主眼としていた伝統的な福音宣教観に対して、特に第二バチカン公会議後の福音宣教観には、カトリック者の再教育をはじめ、「文化の福音化」ということまでもが含まれるようになったからです。

世界憲章（53番参照）で言及されているような、生活様式をも含めた広くて多様性に富んだものから、文化の福音化とは、現実の人間を出発点として、人間同士の関係、および人間と神との関係にまで及ぶべきものなのです。もちろん、福音と文化とは同一視されるべきではありません。福音はむしろ、すべての文化から独立したものです。しかし福音の独立とは、福音と文化とが両立できない関係、あるいは両者が排他的な関係にある、という意味ではありません。それは、福音が宣べ伝えられるべきすべての国には種々の異文化にかかわる人々が住んでいるし、神の国の建設には諸文化を利用する必要もあるので、福音

はどの文化にも従属することなく、しかもそれらすべてに浸透すべきだ、という意味です。換言すれば、諸文化は福音と出会うことによって再生されるべきだし、「文化の福音化」という言葉はこの意味で使用されるものなのです。

ところで、「文化の福音化」という視点で現在最も注目されているのは、アジアです。このことは、1998年にバチカンで開催されたアジア特別シノドスの実りを全世界に分ち合うべく、二千年の大聖年準備の一環として、しかもインドのニューデリーで公布された、教皇ヨハネ・パウロ二世の使徒的勧告『アジアにおける教会』にも言及されています。

世界人口のおよそ三分の二が住んでいる、最も大きな大陸であるアジアの最大の特徴は、古代の文化や宗教および伝統の継承者である、諸民族の多様性にあります。アジアはまさに、種々の価値ある諸文化が埋蔵されている「文化の宝庫」ですから、教会が、自己の使命としての文化の福音化を考えると、アジアを無視することができないのは当然です。

「文化の福音化」という新しい使命を深く自覚した教会が、第二

バチカン公会議後、日本ではあまり知られていませんが、「教皇庁文化評議会」を設立し、定期的に種々の研修会を開催し、異文化との対話に努めているのは、以上のような理由によるものです。

今月の15日から17日にかけて、長崎純心大学で、教皇庁文化評議会主催の「アジア地区研修会」が開催される予定になっていますが、これも全く同じ事情に基づいています。この研修会には、バチカンの評議員のメンバーはもちろん、アジア各国のカトリック教会の代表者や研究者たちが一堂に会し、お互いの研究成果や意見の交換を行います。

このアジアで最初の研修会が長崎純心大学で開催されることになったのは、評議員の一人であった故島本大司教様のご推薦によるものです。その大司教様のご逝去によっても予定を変更することなく、より充実したものにしようということになりました。そのお手伝いをさせていただくわたしたちは、大司教様のご遺志をくんで、単に歓迎の面だけではなく、研修会そのものにも積極的に参加させていただき、現在その準備に取り組んでおります。

Q. たとえば、原子爆弾をつくる技術は一つの文明といえるのでしょうか、決してつくってはならないのです。今、文明の狂い咲きが懸念されていると思いますが……。

A. まさしく言われるとおりです。ここで、インドに伝わる民話を紹介してみましょう。現代文明の狂い咲きについて、皮肉を込めて語っているものです。それは、

あるところに、一人の仙人が住んでいました。何でも不可能なことはないということを知り、伝えた一人の商人が、この仙人のところに来て言いました。

「いくら先生が何でもおできになるといつても、まさかこの虎の皮と骨だけで生きた虎を再生させることはできませんよ。」

これを聞いた仙人は答えました。

「なに、そんなことはわけはない。見ていなさい。今、やって見せてあげよう。」

骨と皮だけで生きた虎を再生させた仙人の技術に、そこに居る者たちは全員感嘆の声をあげて仙人を賛美しました。

しかし、そのあと、仙人も商人も、そこにいた全員がこの虎に食べられてしまいました。という話です。

Q. 日本の伝統的文化と信仰とのかかわりなどという点、また抽象的になって分かりにくくなりますが、信仰と文化とのかかわりについては考える必要があるのでしょうか。

A. そのことが、わたしたち日本のキリスト者にとつては一大関心事となる必要があります。抽象論では分かりにくいので、一つの例をあげて説明してみましょう。

たとえばミサのとき、昔は聖体の前での崇拜の心を形に表すために、片ひざを折って言いました。これは古代ローマの習慣であり、言ってみれば西洋文化が生み出したものをそのまま取り入れたものでした。

日本には昔から、全面的に武装解除して、相手の前に全身を投げ出して全き信頼を表現する、頭を下げるという動作があります。これは日本文化が生んだものです。

典礼改革によって日本の文化が生み出したこの種の動作がミサにとり入れられた、という事実があります。これはほんの一例にすぎませんが、これらからどんどん耕していけば、もっともつと日本という畑の中で、カトリックの信仰は花開くことになると思います。

Q. ところで、今月の15日から教皇庁文化評議会主催の「アジア地区研修会」が純心大学を主会場として開かれるようですが、そのことについて教えてください。

A. そのことについては第二面で山内神父様の方が分かりやすく説明しておられますので、目を通していただければ十分かと思えます。

でも、ちょうど良い機会なので、長崎の信仰が花開くにはどうしたらよいかを考えてみてはと思います。つまり、いま一度わたしたちの信仰について、その熱意、表現、形を耕してみる試みです。

そのよい例が、福音書の世界です。漁師たちの生活と密着させ、網をつくるい、嵐をくぐり抜けつつ、そういう生活の耕しの中から信仰のことが生み出され、花開いていきました。このような初代教徒たちの作業を、いまもそれぞれの時と場所で延々と続けていき、それが次第に多くの方々々と共感・共有できるものになれば、それこそ「信仰の文化内開花」ということになりましょう。

「天の国は畑に隠された宝」(マタイ13・44)だと聖書は指摘しています。日本という畑、日本人という人間の奥深くを耕すと、天の国ということばで表される宝が必ず現れ出てくるはずですよ。

今回の文化評議会主催の研修会が、そんな動きへのはずみとなることを願ってやみません。

前号では、聖アレシアの修道院での生活を「17才から」としていましたが、「15才から」の誤りでした。ここに訂正し、お詫びいたします。

### 3. 聖書研究と福音の

#### 分かち合いとの違い

聖書研究では、聖書を読んで、その聖書が書かれた当時の言語や文化、み言葉が持つ元々の意味などについての研究をします。参加者は、聖書が書かれた時代の人々のことや、そこに込められたメッセージなどについて、研究したり討論したりします。

すなわち、聖書研究とは、2000年前にイスマエルで生活された、キリストにまつわることとがらについての理解を深めることだといえます。聖書研究で成果を得るためには、神父様のような専門家の指導を受けるか、誰かが聖書注釈書などの力を借りてきちんと準備することが必要です。

一方、福音の分かち合いとは、今も生き続けておられる、復活された主キリストと直接に出会うことです。福音の分かち合いの目的は、キリストのみ言葉を「理解すること」ではなく、「愛する主キリストのみ言葉を「直接に聴くこと」なのです。これまでの私たちは、聖書をひもどくとき、聖書研究会的な

アプローチはしても、み言葉を通して直接に主に出会うということは少なかつたと思います。

#### 4. 福音の分かち合いの方法

ここで、「福音の分かち合い7段階法」の概要について紹介したいと思います。これは10人前後のグループで行う方法ですが、個人でやってもよいのです。進行係の司会のもと、次の順序で進めます。

##### 〔第1段階〕

主をお招きする祈りをする。

##### 〔第2段階〕

聖書を読む。

##### 〔第3段階〕

今読んだ箇所の中で心に響いた言葉や文章を、ゆつくりと声に出して3回読む(できるだけ全員が行う)。

##### 〔第4段階〕

今読み上げた言葉を味わいながら、3分間、静かに主の語りかけに耳を傾ける。

##### 〔第5段階〕

自分が読み上げた言葉がなぜ自分の心に響いたか、についての分かち合いを行う。

##### 〔第6段階〕

前回の集いで一緒に計画した活動の結果を報告し合い、次の集いまでにやることについて話し合う。

##### 〔第7段階〕

心から出てくる自由な祈りを捧げる(できるだけ全員が行う)。

このように、非常に簡単なやり方です。所要時間は1時間から1時間半です。

第6段階では、これまでの地区集会などと同じように、教会からの連絡事項の報告や行事の打ち合わせなどでもかまいません。また、小教区で開催される種々の会議でも「始めの祈り」の代わりに、第1〜第4段階の部分を15分程度を使って活用すれば、会議全体の中身が非常に充実したものになります。その際は、第4段階の後に通常の会議をします。この場合も、終わりの祈りは、第7段階の方法で行います。

「なあ〜んだ!簡単な方法ではないか」と思われたに違いありません。そのとおりです。この

方法では、集いの中にキリストにおいでいただき、その回りに車座に座って、弟子たちと同じように、キリストが語りかけてくださるみ言葉に耳を傾けるのです。これが、み言葉を通して直接に主と出会う場、すなわち「秘跡」といわれる理由です。

「福音の分かち合い7段階法」を活用することによって、私たちはみ言葉を通して近づいて来られます。そして、復活して私たちのすぐそばにおられるキリストご自身から力を得ることが出来ます。私たちが、み言葉を中心にして集まるとき、生きて私たちとともにおられるキリストご自身と出会い、信仰生活が深められ、信仰と生活の一致がはかれるとともに、他の人たちの福音化にも寄与することが出来るのです。

次回は、「福音の分かち合い7段階法」について、もう少し詳しく説明したいと思います。



特定の地に根を下ろし、周囲の無機物を吸収・同化・排泄し、成長し、繁殖する。生物の世界は大きにこのような三種類に区分されることを人は知っている。

哲学者たちは、さらに人間各人の中に、精神的活動をする層、動物的活動をする層、植物的活動をする層の三層が区別される、と考えてきた。

人間には、言葉を用いたり、神を信じ礼拝したり、真理を探究したり、芸術作品の創作や鑑賞など美を求めたり、道徳的に立派な良心的生き方をし、世のために尽くそうと努力したり、自分の行動に責任を感じたり、正義のために戦ったり、反省したり、という活動が見られるが、これは人間だけに限られるもので、精神的活動をすする層に基づく。しかし、さらに人間には、感覚的認識や、運動をしたり、動物的本能に動かされた行動をしたり、生命維持の自動的動きをしたり、といった動物と共通の活動をする層もあり、さらに呼吸、栄養摂取、排泄、生殖など植物を含めたあらゆる生命体に共通の活動の層もある。

このような見方を背景にこれ

らの患者を見ると、本来なら誰にも見られるはずのこれら三層の現象の中の高級のものは見られず、ただ、あらゆる生命体に見られる基本的な生命活動だけが残っている状態だと判断される。このことを強調しながら、「植物」状態と表現しているのである。

### カトリック倫理の

#### 「植物状態患者」観

カトリック倫理は、「植物状態患者」をどう理解しているか。

・重度の知能障害を負いながら

生きている隣人

植物状態患者の生命は、健康者のような全領域において充満した生命ではない。重度知能障害をもった状態での生である。大きな重荷を負いながらの生存である。

・神の愛の対象である

霊魂が内在する人格存在

カトリックの人間観によれば、各人には神に直接創造された不滅の霊魂があり、肉体に内在し、肉体の全体を精神的有機体として統合している。これは万人にお

いて等しく実現していることで、この点で植物状態患者も、普通の人間と変わりはない。植物状態患者の生命は、すべての人間の生命と等しい価値を備えている。この患者は人格存在（ペルソナ）であり、他の者と同じように神の個別的愛の対象である。患者には、洗礼の秘跡や堅信の秘跡や病者の塗油の秘跡は授けられる。秘跡による罪の赦しも条件付きで与えられる。病者への祝福も与えられる。

・異常は肉体部分—精神活動に  
関与する脳部分に重大な損傷

現代の医学によれば、脳の各部分分は、他の部分との緊密な関連の中にありながら、それぞれに固有の活動をする。植物状態患者の場合、人間の高度の精神活動に関与する部分である大脳新皮質系に、重大な損傷があると推定されるという。この説明を含めた現代医学は「植物状態」を次のように説明できよう。

人間の肉体は一個の受精卵が分裂・分化して出来上がった独立の全体であるが、この全体を統合

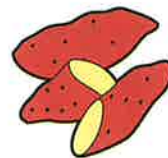
している霊魂の諸活動は、肉体に多かれ少なかれ依存しながら、また種々の規定を受けながら行われる。霊魂の活動内容はさまざまであり、緊密に係る肉体部分もそれに応じて異なっている。霊魂の「高度の精神活動」に特に深く関わるのは、特定の脳・神経系である。植物状態患者の場合、この部分に重大な損傷があつて機能できず、必要な役割を果たせなため、重度の知能・意識障害が生じているのである。他方、損傷のない肉体部分に関わる霊魂の生命諸活動は、問題なく行われている。

すなわち、この重い知能・意識障害の原因は、霊魂ではなく、肉体である。霊魂が「高度の精神活動」を行うために必要としている、脳・神経系の一部の損傷にある。その損傷の程度によって病状の重篤さにも違いが出てくるし、もし治療によって損傷が治癒したら、意識が戻るといふことにもなりうる。





## 「求めよ、さらば・・・」



5年生が例年行う学校園での焼イモ大会が事情があってできなくなり、収穫したイモはみんなで分けて持ち帰ることになった。分けるといっても一人に2〜3個だが、子どもたちはどんな小さなイモでも大事そうに持ち帰った。ところが、ロッカーにイモを置いたままの子が一人いた。いつも人の後からついていくような子、カズオである。三日たってもそのままなので理由を聞いてみると、「どうせ、捨ててしまうモン」と言う。

カズオは勉強が好きな子ではなかった。母親は、カズオの無気力な性格を気にしながらも、一日中忙しい家業のため、ほとんどカズオに構ってやれなかった。PTAで、「子どもはほめて育てろ」と聞かされた時は、ほめる材料が見つからないと悲しい顔をした。そして、「繰り下りの引き算ができない」と担任に言われた時には、かなりショックを受けた様子であった。引き算は、家庭で毎日20分ずつきつきりで練習して、一週間でできるようになった。それ以来、母親はできる限り時間を作って、カズオにつき合うことにした。

母親にイモのことを電話すると、「私は、まだダメ親ですね・・・」と言葉を詰まらせた。あの引き算の練習から4カ月、可能な仕事は夜中に回し、自分の睡眠時間も削ってカズオのために時間を作ったという。それでも、カズオの心の中では、まだ「かまってくれない母親」だったのだろうか。

放課後、「カズオのお母さんなら、このイモでおいしい料理を作ってくれるさ」と言ってみると、少し表情をゆるめて、カズオはイモを持ち帰った。

・・・「ぼく達が作ったイモだよ」と言って、3個のイモを持って帰りました。一番大きなイモで天ぷらを作り、残りはご飯に炊き込んでイモご飯を作りました。家族みんなでおいしくいただきました。カズオはとても得意気でうれしそうでした。こんなうれしそうなカズオの顔は、初めて見たような気がします。先生、ありがとうございました・・・

カズオが持ち帰ったイモはその日の夕食に加えられ、家族みんなで秋の味覚を楽しんだという。カズオのうれしそうな笑顔、それ以上に、その時の母親の気持ちを思うと、こちらまで嬉しくなった。こんな親がたくさんいると、担任はとても助かるものである。

子どもたちが持ち帰ったイモのその後が気になって、ホームルームの時間に尋ねてみた。結果、3分の1が、まだそのままだったり捨ててしまったりしていた。たった3個の、それも小さなイモをわざわざ料理するのは煩わしく、ありがた迷惑なのかもしれない。だが、どの子も例外なく、自分のことを親に見てもらいたいし、ちょっとでもいいからほめてもらいたいと思っている。そして、このほめ言葉こそが、子どもにやる気を起こさせるのである。

あの時のカズオの笑顔が今も忘れられないと、カズオの母は後で語った。あれ以来、母親はカズオをほめることに徹した。それでも、カズオから無気力な表情が消え、子どもらしい輝きが見られるまでには、なお1年近くの時間を要した。そこに来るまでには、母親のなみなみならぬ忍耐と祈りにも似た献身的な努力があったし、それを支えたのは、まぎれもなく、わが子の笑顔見たさの親としての大きな愛情だったと言える。「求めよ、さらば、与えられん」という聖書の一節を連想させるような、一途な愛である。

「今夜は皆既月食だよ」と聞いた冬の夜、カズオ母子はあいにくの天気で雲から顔を出さない月を待ち続けた。厚い雲が切れて赤銅色の皆既月食を見ることができたのは、待ち始めてから2時間も後の午前1時ごろだったと、担任は翌朝一番にカズオから聞かされた。

その担任はといえば、皆既月食の赤銅色の満月を、いまだに、一度も拝んだことがないのである。

(にしむら よしを)



# 小教区 ピックアップ

## どう祝う

### 五十周年

#### ―城山教会―

小教区の祝祭をどう祝うか。時間の中で生きる教会のひとつの課題であろう。

一過性の行事として終わるのではなく、小教区を育て、活性化する機会にしようと、約3年にわたる種々の取り組みを計画している、城山教会の動きを追ってみた。

小教区評議会の深堀柱会長に聞く。

#### ◆二つの五十周年がある◆

第一は、今年10月19日

聖アウグスチノ修道会の初代派遣司祭二人が米国から来日して、今年10月で五十周年です。修道会が産声をあげた城山教会で感謝の記念ミサが行われます。アメリカの新管区長をはじめ、駐日教皇庁大使、高見司教、国内外からの司教、修道者、信徒ら約四百人が参列の予定です。小教区にとつて記念すべき節目です。

第二は、平成16年

1954年、被爆後、復興のきざしが見えた浦上小教区から城山教会が分離・独立(信徒七百人

現在二千八百人)してから、再来年で五十周年になります。いずれも二十一世紀へのステップとして大事に迎え、力強い出発点にしたいと思っています。

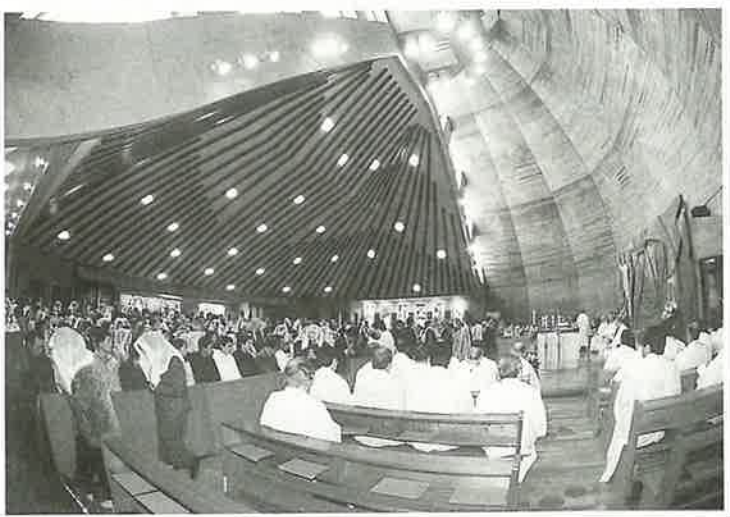
#### ◆記念行事の計画は◆

この4月、五十周年記念行事特別委員会(本村保委員長)ができました。講演会、信徒大会、文化祭、記念ミサ・式典、聖体行列などを予定。新しい試みとしては崇敬する「聖アウグスチノの足跡を訪ねる」企画があり、聖人が眠るイタリアのミラノなどに80数人(二班編成)の巡礼団を送り出すことにしています。これらの行事を五つの部門で担当し、今、細かい検討に入っています。

記念誌は過去の歩みを取り上げることも大事ですが、未来の教会を若者に託す意味から、一人でも多くの若い人たちの声を取り上げたいと思っています。

#### ◆アンケートを求めたか◆

委員だけが大きな声をあげても信徒への浸透は難しいため、各世帯にアンケートを配布し、五十周年に何をなすべきかを伺いながら、関心を高めてもらいました。約三百人からの回答を得ています。応募標語の一例ですが、「活力ある新世紀の城山共同体づくりを進めよう」を筆頭に、「祖先の信仰を新世紀に引き継ごう」など、さまざまない標語が届いています。今後は毎月発行の「教会ニュース」に掲載し、教会玄関の両サイドにも立て、意識の高揚につなげたいと思っています。



二代目として大聖年に建設した城山教会の聖堂(450席)

◆異色のものがあじましたら◆  
初代主任司祭のトマス・パーセル神父(89歳)が、フランススコ病院で療養中です。小教区、聖マリア学院の産みの親として、レジオ・マリエ会員が毎日二交替で介護を手伝っています。形こそ違え、恩人に報いる奉仕の「記念行事」だと思えます。また修道会所属の全国にある葛西(東京)、港(名古屋)、笹丘(福岡)、城山(長崎)の、四小教区の信徒会が絆を深める、「四信徒会」を作ろうという動きもあります。